

完了報告書

記入年月日 2026年3月30日
採択団体名 樟葉南コミュニティ協議会

■事業概要

基本情報	
事業名	異年齢間(地域の小学生を核とする高齢者、未就学児)の防災教室 「おじいちゃん、おばあちゃん、そして園児と小学生たち
事業内容	事業内容①:高齢者向け防災教室(小学生を交えて) 事業内容②:京都大学防災研究所 宇治川オープンラボラトリー見学 事業内容③:大阪市立阿倍野防災センター見学 事業内容④:未就学児向け防災教室 事業内容⑤:能登半島被災地訪問
事業背景	<p>樟葉南コミュニティ協議会の防災委員会では、年度当初の「キックオフミーティング」(今年度の各自治会防災委員の顔合わせ会)では、各自治会の防災委員が最初に避難所を開設することになることを確認し、関西大学教授から、各地の避難所運営の実例などを学んでいる</p> <p>また、10 数年前より「キッズ防災キャンプ」と称して、毎年 9 月第 1 週の土日に「小学校の体育館」を利用して、小学生の宿泊防災キャンプを実施してきた。小学 4 年生以上を対象として、毎年 5 月頃から募集を開始し、夏休み前には参加メンバーを確定している。(毎年30名ほどの小学生で実施)(小学生にとって、学校に「お泊り」すること自体が楽しいようである)</p> <p>1泊2日の主なメニューは、以下の内容である。</p> <p>1 日目(15時00分～) 1, 給水訓練(自治体の水道局に依頼し、実際の給水車にきてもらい給水を受ける訓練。500ミリリットルペットボトル2本に給水を受けて、その水分で1泊2日を過ごすことを原則としている)2, 火起こし体験(マッチで火をつける体験。近年の小学生はマッチを使ったことがないことから実施)3, 非常時のトイレについて、凝固剤の使い方、4, 非常食体験(アルファ化米を食べたことがない小学生も多くいることから実施)夕食代わり、5, クロスロードゲーム(非常時に生じる心理的葛藤をゲーム上で体験)</p> <p>2日目(～11時00分) 1, 消防団による救急救命訓練(毛布を使った緊急担架の作り方、包帯の使い方)2, 心臓マッサージ(胸骨圧迫)訓練、3, AED の使用訓練(校内のどこに AED があるか、その使い方を習得)</p> <p>この2日間の内容を体験した小学生には、「キッズ防災リーダー証」(カード)を発行し、児童たちに自尊意識をもってもらっている。</p> <p>この小学生たちが高校生、大学生、大人へと進んでいく中で「地域の防災リーダー」になることを期待して防災キャンプを実施してきた。</p> <p>この背景があり、彼ら小学生の防災リーダーたちを核にして、地域の防災教育全体を考えている。実際にこの防災キャンプを経験した中高生が、「先輩」として、毎年のキャンプの「お手伝い」として、一緒に宿泊してくれるという流れが生じ始めている。そこで、本年度からは意図的に小学生に防災関連行事に参加してもらい、「異年齢間の防災教育」実践を通じて、より効果的な防災教育が実現するのではないかと考えている。まずは高齢者と小学生を混在させて、防災教育を実施する、また、未就学児と小学生を混在させて防災教育を実施する。</p> <p>一方で小学生には、キッズ防災キャンプで得た防災知識以上のものを提供する機会を与える。(特に水害のことは、防災キャンプではまったく触れることができていないため、水害の知見を何とか小学生に与える機会を持ちたい。地震に関しては、より一層リアルなものを小学生に提供したい。)</p> <p>これらの背景から、今次の事業を計画した。①高齢者向け防災教室には小学生が各高齢者の班に混ざる形で参加させ、キッズ防災キャンプで学んだ凝固剤の使い方を小学生が高齢者に教える場面をつくる。②京都大学の水害を主に想定した「宇治川オープンラボラトリー」を小学生に見学させる。③ジオラマなどで地震を再現している大阪市立阿倍野防災センター見学を予定する。④未就学児向け防災教室を小学生主体で実施する。⑤2年前に生じた石川県能登半島地震で被害が生じた地域の中学生と樟葉南校区の小中生が交流する場面を提供し、災害からの復興を現実の被災者から学ぶ場面を提供する。特に「復興」については、なかなか学ぶ機会がないため、現地の中生から本地域の小中生が復興について、一緒に考える場面を作ることを目標としている。この⑤の訪問をきっかけに次年度以降は、双方の学校で「防災」をキーワードに交流する環境を作りたい。</p> <p>以上の背景をもって、5つの事業を計画し実施することとした。</p>

コミュニティ 設立の経緯	自治会の連合体として、すでに存在するコミュニティ協議会の中の「防災委員会」を軸として、地域(小学校区)の小学生、中学生を中心に防災リーダーの育成をしてきた。その防災リーダーが様々な行事を通して、地域の大人たちと一緒に防災教育を展開する流れを作ってきている。 また、「コミュニティ協議会」が毎月1回開催されており、そこに小学校管理職、中学校管理職が出席しており、例えば、事業ごとの小学生、中学生の募集などは、毎月の会議で共有できる環境がある。この協議会には、地域の「保育園」園長も参加しており、④の未就学児防災教室などは、この協議会で当該学校の管理職同士で大枠の日程決定ができる環境もあった。
本事業に関する過去の 取り組み内容	・背景でも述べたキッズ防災キャンプの実施が防災教育全体の中で大きな意味を持っている。
事業体制	・樟葉南コミュニティ協議会:防災委員会 15名 ・本事業向け 委員会内 小グループ 4名 主に企画、会計
全体スケジュール	<9月~10月中旬> 10月19日(日)午前 高齢者向け防災教室(小学生も参加) (10月後半 宇治川ラボラトリー見学者 南小学校、西中学校で募集) 11月1日(土)午前 京都大学防災研究所附属 宇治川オープンラボラトリー見学 (12月 1月10日(土)阿倍野防災センター見学の希望児童生徒、南小学校、西中学校で募集) 1月10日(土)午後 大阪市立阿倍野防災センター見学 2月13日(金)午後 小学生中学生による未就学児向け防災授業(非常用トイレ制作など) 3月20日(金)~21日(土) 石川県能登志賀町を小学生、中学生で訪問。現地の中学生による被災した中学校の案内と当時の様子を聞き取る。
事業目標・事業成果	
事業目標全般 (教育提供者側)	樟葉南コミュニティ協議会(防災教育提供者として) 1, 地域の小中生への防災知識増大。(専門家から指導を受ける場面を2回以上設定する) 2, 地震被害だけを想定せず、地域特性としてある「水害」の意識を高める。 3, 被災現場を実際に見学することで、巨大地震に向けた防災意識向上を図ると同時に「復興」について考える機会としたい。 地域の小中学生(防災教育受講者であり、受講した内容を教える側に回る) 1, 将来の地域住民(防災リーダー)としての知見を得ること。 2, 地震被害だけを想定するのではなく、「水害」の可能性を考えられるようにすること 3, 高齢者や未就学児と「防災」をキーワードにつながる際にしっかりと地域の防災リーダーとして防災知識を伝達できるようになること。
事業成果全般 (教育提供者)	1, 小中生の防災知識の増大は、地震などに限定せず、広義の災害を学べるようにする。 2, 今年度、各事業では、延べ人数で100人程度の地域の小中学生が、様々な場面で防災知識を得、その知識を地域住民に提供する場面を作る。
事業目標全般 (参加者側)	1, 小中生が積極的に地域の防災訓練時にリーダー的な視点を身に付けるようにする。 2, 受け身の防災訓練ではなく、小中生が、地域の防災力の弱点などを積極的に指摘できるようにする。具体的には、傾斜地と河川流域地域の両方の地域的特性を持つ、本校区で「意外と水害のリスクが高いこと」などの視点を小中生が理解できるようにする。 3, 地震災害については、同年齢の能登の小中生と交流することで現実の被災者の心情や復興への希望などを共有し、復興のリーダーとしての役割を認識させたい。
事業成果全般 (参加者側)	1, 地域の大人集団と「防災」を共通ワードに緊急時の対応を学ぶ。 2, 地震だけでなく、水害も視野に入れた防災知識獲得を意識する。 3, 将来の地域の防災リーダーとなることを意識して、知識習得に努める。

<p>展開できる 知見やノウハウ</p>	<p>1, 小学生が未就学児に防災教育を展開することで、未就学児がその後小学校に進学し、その小学生が、再び未就学児(後輩)に防災教育を展開する、また、同じような循環を中学生と小学生の間にも生じさせ、異年齢間の上下の循環を繰り返すことで、結果として、地域全体(大人)の防災力が向上するものと考ええる。</p> <p>2, 異年齢(小学生が高齢者に交じって、防災教育を受ける)での交流は、その空間に新しい空気を生み出し、80歳の方が小学生と一緒に非常時のトイレ問題を考えるという状況は、相互に新しい学びを生み出すものと思われる。</p> <p>3, 防災教育は、「年齢」「性差」「障害の有無」等々を越えて、すべての人々が平等に学べる内容であり、特に異年齢間での交流がしやすい内容と思われる。</p>
<p>コミュニティ防災教育の重要な観点</p>	<p>防災教育の実施主体者は、あくまでも地域住民であり、そこには、様々な年齢、立場の人々が存在することを意識すべきと考えている。災害弱者と呼ばれる人々への配慮を考えると、小学生高学年あたりを中心に防災教育の軸を持っていることが重要と思われる。特に平日の日中の時間帯は、高齢者と小学生、中学生、幼稚園児が地域にいることになり、小中生が災害弱者を意識できる防災教育を実践したい。また、30年後に起こるであろう巨大地震を想定すると現在の小学生世代がどこまで防災力を高められるかが、地域の防災力に大きく影響するものと考えている。</p>
<p>残課題等</p>	<p>1, 小学校、中学校という具体的学校間の協力を得ていくことが課題。</p> <p>2, この循環を地域の高校レベルにまで引き上げることができれば、さらに高度な内容に踏み込めると思われる。</p> <p>3, 地域の外国籍の人々を防災教育にどのように巻き込んでいけるのかは課題である。</p>

■事業内容

事業内容① 高齢者向け防災教室	
事業内容①目標 (提供者側)	<p>1, 指定避難所への避難が困難な高齢者の自宅避難時を想定した自助に関する知識獲得</p> <p>2, 小学生と一緒に学ぶことで、疑似的ではあるものの「孫」に教わる「祖父母」たちという空気を本教室全体で共有すること。</p> <p>3, 小学生が地域には、高齢者いることの認識、さらには災害時に高齢者を意識できるようになること。</p>
事業内容①目標 (参加者側)	<p>1, 参加した高齢者の自宅避難時に必要な防災知識の獲得</p> <p>2, 参加した小学生が同じ地域の高齢者の存在を意識し、災害時に高齢者支援が発生することを理解すること。</p>
事業内容①高齢者向け防災教室(小学生も一緒に) (実施日:10/19)	<p>講演日付:10月19日 場所:南小学校 図書室 開始時刻:9時2分(講師打ち合わせ 準備開始時間) 講演開始時間:10時00分 講演終了時刻:11時52分 撤収作業終了:12時18分 参加者 高齢者、小学生、防災委員含めて56名。小学生は6名参加。</p> <p><大まかなスケジュール></p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災委員長 山本より 挨拶 ・小学生 自己紹介 ・来賓紹介 ・講義(10時9分~11時44分) <ol style="list-style-type: none"> 1、講義 2、グループワーク 2分 3、講義 4、凝固剤体験 5、トイレ作り <p>・山本より挨拶</p> <p><避難の基本姿勢></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命は自分で守る意識を持つ。 ・地域での助け合い・事前の備えが重要。 ・在宅避難を目指すのが理想(避難所は最終手段)。 ・避難所=誰でも利用可。国籍、居住地、障がい、宗教は関係なし。 ・避難所には行かず、出先の避難所に避難してOK。 ・避難所生活は過酷(例:体育館の雑魚寝、プライバシーなし、長期化)。 <p><在宅避難の条件></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家が倒壊していない ・家の中がぐちゃぐちゃでない ・食料・水の備蓄がある ・なにより、自分が「生きている」ことが前提! <p><災害で命を失う主な原因></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災:津波で約9割死亡 ・阪神・淡路大震災:家屋倒壊による圧死が約9割 ・熊本地震:避難生活中の関連死の方が多かった <p><家の耐震性について></p>



・建築年によって耐震性が異なる：
1980年(昭和55年)以前 → 危険(5割以上が倒壊)
1981～1998年(平成10年) → 中程度(2割が倒壊)
1998年以降 → 比較的安全
・耐震診断は市役所(枚方市:住宅まちづくり課)に申請可能。
・診断結果がNGの場合、補強工事に補助金あり。
・家具の固定は必須(特にタンス、本棚、冷蔵庫など)
・方法例:L字金具、突っ張り棒
・倒れた先に人が寝ないように配置する工夫も重要。

<避難所の実態>

・避難所は「誰でも入れる」が、実際はスペースに限界あり。
・避難所での生活は非常に過酷で、長期滞在は命の危険も。

<避難所へ行くべきタイミング>

これから台風や大雨が来る
出先で災害に遭遇した
家が倒壊・潰れそう
家の中がめちゃくちゃ
トイレが使えない
食料や水がない

<停電時の対応>

・停電時にろうそくはNG(火災の危険あり)。
・地震対応の自動遮断ブレーカーの設置を検討(ハウスメーカーに相談可能)。
・避難時には必ずブレーカーを落とす。

<トイレトーパー>

- 工場の多くが静岡・四国に集中 → 災害時に生産停止リスクあり。
- 1か月分は備蓄しておくのが安心。

<トイレ>

・水が流れなくても排泄は必要 → 簡易トイレの準備が重要。
・水をバケツで流すのはNG(排水管破損時に家の中が汚水まみれになる可能性あり)。
・排水管の破損確認が取れるまで、バケツ流しは禁止。
・トイレ用の凝固剤とビニール袋を使用して対応。


使い方:


トイレの便座に大きめのビニール袋をセット。
凝固剤を中に入れて使う。
排泄物が固まったら袋ごと縛ってゴミとして廃棄。
ゴミ袋は45L～が目安。
凝固剤は各家庭に十分量備蓄を。
・避難所では人が来る前にトイレにビニールをかけておくのが推奨されている。



<<災害時のトイレの基本的な考え方>>



	<p>・トイレが使えなくなるケースが多く、自宅でのトイレ対策が重要。</p> <p>・「トイレが使えない＝命に関わる問題」→ 食事や水を我慢 → 脱水・体力低下 → 命の危険。</p> <p><携帯トイレ・簡易トイレの使い方と注意点></p> <p>使い方：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・排泄後に凝固剤を入れる or あらかじめ入れておく(どちらでも可)。 ・凝固剤は「水でも固まる」ものが多いが、「尿」は固まりにくい。 ・「1リットル固まる」と書かれていても、尿では機能が弱いこともある。 ・「おしっこは固まりにくい」→製品選びは慎重に！ <p><トイレの処理とごみの捨て方></p> <ul style="list-style-type: none"> ・排泄物は「燃えるゴミ」として出せる場合が多い(自治体ルール確認)。 ・大量になると、ごみ収集車が圧縮して壊れることもある → 保管・処理に注意。 ・自宅では、生ごみとは分けて「専用容器」に保管がおすすめ。 ・避難所では専用の場所に集める。行政が1～2日おきに回収する例が多い。 <p>< 避難所の事例 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレが汚れて使えない → 校庭や建物裏で排泄 → 衛生環境の悪化。 ・グラウンドに埋めた例も → 臭気・細菌で使えなくなり、土の入れ替えが必要に。 ・避難所のトイレ清掃は行政ではなく「住民自身」で行う。 <p><衛生・におい対策></p> <ul style="list-style-type: none"> ・消臭凝固剤を選ぶことが大切。 ・「消臭袋」も有効(介護・ペット用品用のものでもOK)。 <p>(成果)</p> <p>高齢の参加者が「小学生」と一緒にワークすることで明らかに楽しそうに防災に関する知識を得ていた。「小学生」も地域の高齢者と顔なじみになるきっかけとなった。</p> <p>段ボールトイレ制作の場面は、小学生が各班で中心となりながら、高齢者が小学生に尋ねる場面もあった。</p> <p>例、凝固剤が先か、排せつ物のあとで凝固剤を入れるのか、などを高齢者が小学生に質問していたのは印象的だった。</p>	
<p>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>(課題)</p> <p>同自治会で高齢者、小学生とバランスよくワークチームを作ることができなかった。</p> <p>同じ自治会の高齢者と小学生の場合、「〇〇さんの家のおじいちゃん」という関係が生まれたが、自治会が違うところでは、その親密さは生まれなかった。</p> <p>(課題解決)</p> <p>一部、小学生がワークグループを移動することで、グループ間の親密度合いを標準化することができた。</p>	

<p>事業内容①を実施する上で工夫した点</p>	<p>小学生の参加については、9月に実施した「キッズ防災キャンプ」参加者を中心に募った。</p>	
<p>事業内容① 残課題等</p>	<p>小学生の学齢で小学4年生と6年生での発達段階がかなり大きく違い、高齢者に対し、模範を示す形でワークショップをリードできたのは、5年生以上であった。次年度以降、4年生の参加をどうサポートするかが課題。</p>	
<p>事業内容② 京都大学オープンラボラトリー見学</p>		
<p>事業内容②目標 (提供者側)</p>	<p>1, 小学生に防災の専門家から主に水害について学ぶことを提供することを目標とした 2, 本物の水の圧力を体験することで水害の怖さを実感できるような体験工夫をすることを目標とした。</p>	
<p>事業内容②目標 (参加者側)</p>	<p>1, 京都大学防災研究所の教授から小学生が水害の怖さを学ぶことを目標とする。 2, 教室内の学びだけではなく、本物の水を体験することで災害の実態を学ぶことを目標とする。</p>	
<p>事業内容②京都大学宇治川オープンラボラトリー見学 (実施日:11/1)</p>	<p>日付:11月1日 場所:京都大学防災研究所 宇治川オープンラボラトリー見学と講義 <参加者> 小学生:15人 中学生:2名 大人:15人 <スケジュール> 8:30 南小学校 集合 8:37 山本委員長 挨拶 8:45 バス搭乗 移動 9:30 バス到着 徒歩 9:44到着 9:45 防災センター講義 10:20 講義終了 休憩 10:30~11:35 体験 11:37~11:51 講義 11:56~12:24 移動 12:54 南小学校 到着&解散</p> <p>研究所からの講義内容 <水害> 球磨川: 幅1キロほどになった 川の水位が上がることによって自然の水が流れない→水が溢れた 地域の人が真っ先に助けに来てくれた→60人ほど助かった 14人死亡</p>	

	<p>九州北部豪雨: 水だけでなく、土砂、木まで流れてきた <危険な場所> アンダーパス:標高が高いところの水が流れ込み、急激に水位が上がって危険 <水位が高い時に入っては行けない理由> ・流されるから ・水中を見ることができないため躓いたり、こけたりするから ・落とし穴があるから(マンホールが流されてしまう) これらの危険性から浸水したら避難はしない方がいい ハザードマップにも洪水ハザードマップ、内水ハザードマップなど様々な種類があるため、状況に応じた避難場所確認しておく必要がある。</p> <p>1、 降雨流出 琵琶湖北部の高時川流域を1/1500の縮尺で再現した地表の模型に人工の雨を降らして川となって流れる様子を調べる装置を見学した。地形模型の上に立って、豪雨と雨が地表の流れとなる様子や、1時間で200mmの豪雨を体験することができる。</p> <p><体験内容> 1、 浸水ドア開閉体験 洪水などで地下室へ水が流れ込むことがある地下室にドアがあると浸水したところから、あるいは水の流れ込む部屋へ避難するときにドアを開けねばならない。水深が少し深くなるだけで、ドアの重さが急激に重くなることを体験した。ドアにかかる全水圧は水深によって変わり、20cmの時の全水圧は16kgほどだが、40cm、50cmとなると全水圧は64kg、100kgとなり、成人男性でも開けるのが困難であった。</p> <p>(成果) 小学校の体育館などで行う防災訓練や防災教室は、どうしても「地震」を想定したものとなるが、本地域は淀川流域ということもあり「水害」の可能性も相当高い。 このことから専門家による河川水害のレクチャーの機会を得ることができた。 小学生たちも講義だけでなく、体験も行ったことから、多くの学びを得たように思う。</p>	
<p>事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>(課題) 宇治川ラボラトリーは、学校組織であれば、土日での見学を受け入れるというルールで運営されている中、当初は、見学は不可との判断もありました。しかし、事実上、小学生中心の集団であることを説明し、何とか見学を受け入れてもらえた。</p> <p>(課題解決) 現地に数回、足を運び、説明を行い、見学を実現していただいた。</p>	

<p>事業内容②を実施する上で工夫した点</p>	<p>京都大学防災研究所の多くの先生方から、ご支援をいただき、見学を実現することができた。</p>	
<p>事業内容② 残課題等</p>	<p>降雨水害に関して、一定、学ぶことができたが、具体的な堤防決壊による「水害被害」について、今後も地域の子もたちが意識できるような防災訓練を開発する必要がある。淀川流域にある地域としては、地震と同じように「水害」も想定しながら学びを深めたい。一方で、水害被害に関して、具体的学ぶことができる施設などが少なく、今後の課題としたい。</p>	
<p>事業内容③ 大阪市立阿倍野防災センター見学 体験</p>		
<p>事業内容③目標 (提供者側)</p>	<p>1, 小学生に地震の被害(火災も含めた被害状況)をジオラマなどを通じて、理解し、地域で発災した際の行動について学ぶことを目的として実施。 2, 映像などで地震の被害を見ることは多くあるが、ジオラマになっている点を重視し、本施設の見学を実施した。映像ではないジオラマから小学生なりに感じるものがあることを期待する。</p>	
<p>事業内容③目標 (参加者側)</p>	<p>1, ジオラマを見た児童生徒が、地震直後の街並みを経験することが目標。映像などで見た知識では対応が難しいことを実感することが目標。 2, 地震の被害として、阪神淡路大震災に生じた火災があることを知る。火災からの脱出、消火器の使い方などを学ぶことが目標</p>	
<p>実施内容③「大阪市立阿倍野防災センター見学」 (実施日:1/10)</p>	<p>日付:2026年1月10日 場所:体験型防災学習施設 大阪市立阿倍野防災センター あべのタスカル 参加者 小学生:10人 大人:7人 <スケジュール概要> 12:00 南小学校 集合 12:29 バス搭乗 13:29 バス到着 13:35 阿倍野防災センター到着 14:00 体験プログラム開始 15:00 体験プログラム終了 15:11 阿倍野防災センター出発 16:17 南小学校到着、解散</p> <p><体験プログラム内容> 目的:地震への備えや、災害対応方法について学ぶ 講義→体験の流れを7つ行った</p> <p>はじめに、タスカルシアターにて導入動画を視聴 座っている椅子は振動が伝わるようになっており、映像と連動して目だけでなく体でも地震を体験した。 動画内容 直下型地震を例に、父、母、姉、弟の家族がいつもと同じ日常を過ごしている中で突然地震にあう様子、会ったあとの様子が描かれていた。突然家族とばらばらになるかもしれないということがよくわかった。</p> <p>1:地震直後の行動について (講義パート) ・緊急地震速報が流れたらどうするか</p>	 

- 1 揺れを待たずにとにかく頭を守る
- 2 火に近づかない

・揺れが収まったらどうするか

- 1 火元を確認
- 2 出口を空けておく
- 3 ラジオやテレビで津波や余震の情報を得る

・家から出る場合はどうするか

- 1 玄関に行き先を書く
- 2 通電火災を防ぐため、ブレーカーを切る(阪神・淡路大震災では6割が通電火災による火災)

(体験パート)

- ・リビングで地震が起きた際どうなるかの映像を視聴
→映像視聴後、映像と同じリビングで実際に火元を探し、消す体験
- ・コンロなどは火を消すだけでなく、元栓までしっかりと消す
- ・ブレーカーは真っ暗になってしまうため、最後に消す

2:初期消火体験

(講義パート)

初期消火:火が小さい場合の応急的な消化
小さな火のうちに消化することで被害を最小限にできる。

火事を見つけたら？

- 1「火事だ！」と大声で発生を伝える
 - 2 安全な場所で119番通報を依頼
 - 3 可能であれば初期消火を実施
- ※天井まで火が来たら諦めて避難する

(体験パート)

消火器を使った初期消火体験

- ・体験では、体験用ABC粉末消火器を使用。
- ・ABC粉末消火器は、ホースの先からピンクの粉が出てきて、この粉で空気を遮断することによって火を消すという仕組みになっている。
- ・この粉は、15秒ほどで出尽くすため、小さな火にしか間に合わない。→そのため、火が天井まで来ていたら初期消火は諦め、安全な場所へ逃げる必要がある。
- ・古い消火器は破裂する危険があるので使わない

【使い方】

- 1 黄色いピンを抜く
- 2 ホースの先を持って火に向ける
- 3 レバーを握る

※炎ではなく、火元を狙う！

※消火器は持ち上げない！

消火器を使い方通りに操作し、映像の火元に向かって粉をかける。
炎を狙いがちだが、火元を狙わないとなかなか火が消えない。

- ・実際に中学生が天ぷら油の火災に対して初期消火を行い、被害を最小限にできた例がある。その中学生はあべのタスカルで初期消火を体験していた。
- ・天ぷら油に水をかけたときの写真を閲覧した。非常に高いところまで火がのぼっており、危険性がわかる。



3:煙避難体験

(講義パート)

・火災は煙が一番危険

・煙の進むスピード

横方向:人が歩く速度と同じ

縦方向:人が階段を上る速度の10倍速い

・煙には一酸化炭素が含まれており、たくさん吸うと呼吸できなくなるため危険

・煙の中での避難方法

1 ハンカチで鼻と口をおさえる

2 姿勢を低くする

3 壁を触りながらゆっくりと進む

※走ると余計に煙を吸ったり、コケたりするため絶対にゆっくりと進む

4 誘導灯に向かって進む

5 出ることができたら、必ず扉を閉める(出たら絶対に戻らない)

(体験パート)

練習用の煙を利用し避難体験を行った。

最後の人がドアを閉めるところまでしっかりと体験した。

・煙は白く濃く、足下や前が非常に見にくい状態となっており、走ることの危険性を体感できる。

・透明なガラスで外から見ることはできたが、白い煙は上の方に多く姿勢を低くして逃げることの重要性が見てわかる。

4:瓦礫の町

(講義パート)

余震について

本震が終わっても、何度も余震はやってくる。余震によって、ガラスや看板が落ちてくるかもしれないため、建物の近くは気をつける必要がある。

津波について

津波予想高は此花区では5m

津波が発生した際は、津波避難ビルに避難する。なければ3f以上の頑丈な建物へ避難する。

(体験パート)

津波避難ビルに登ってみる。5mの津波を映像でみると圧倒される高さであることがわかる。

★津波の3原則:はやく、とおい、たかく

119番通報について

(体験パート)

公衆電話からの119番通報を体験。

・家が燃えているとき

1 受話器をあげる

2 赤のボタンを押す

3 受話器を耳に当てる

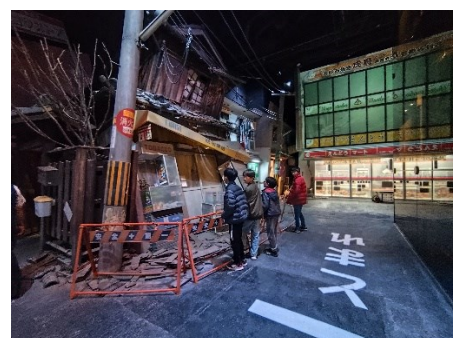
4 119番を押す

5 オペレーターの質問に答える

公衆電話に触れたことがない人が多いため、体験しておく必要がある。

<自由時間>

地震直後の街並みを自由に散策



5:震災後の街中で注意すること
(講義パート)

震災後の街中は危険なことがたくさんある。
アンテナが落ちそうになっていたり、がれきに埋もれたガス漏れの可能性があるバイクがあったり、歩いている途中に余震が発生したりするため、あらゆるものに注意して行動する必要がある。

(体験パート)

講義を聞いている途中に緊急地震速報がなり、その場でしゃがんで頭を守った。

6:防災備蓄品について

震災が起きると、水や食料などが来るまでに3日かかるといわれている。

- ・水は1人1日3L必要
- ・お茶やジュースも用意しておくべし
- ・ご飯は、日持ちがする自分が好きなものを選び、お菓子やカップ麺も用意する
- ・ローリングストックで備える
- ・1週間分は備えておくといよい

7:マンションなどの高層階から避難はしごや救助袋での避難方法について
(講義パート)

構想界からの避難には、バルコニーに設置されている避難はしごや救助袋が重要になる。

注意点:避難はしごの上や下に物を置かないこと、蹴破り戸に物を置かないこと。

【開け方】

- 1 チャイルドロックを外して開ける
- 2 下に誰もいないことを確認して、レバーを押すと出てくる

・斜降式救助袋→下で固定するため、固定できる人がいないとできない

・垂直型救助袋→出すことさえできれば一人でも安全に降りられる

注意点:必ず足から入れる、袋がねじれた状態では危険らせん状に降りる形となる。

(体験パート)

垂直型救助袋を使用して、高さ2mから降りる体験
垂直になっているためスピードが出そうに感じるが、予想以上にゆっくりとらせん状に回転して降りることができた。

■成果(提供者 or 参加者)

1, 小学生にとっては、地震などの情報に関しては、映像などの情報から得た知識よりも今回のようにジオラマで体験することが印象にも残り、より実践的な知識が身につくことが実感できた。

2, 以下、参加者の児童の感想

『いろいろなことをたいけんできたし、そうぞうとちがうかった。また家でいかせることが、いろいろ勉強になった『シアターや、消火器体験などで、地震で揺れてる間、揺れた後の火事などの対処法がよくわかった。た』
『地震などがリアルだった、実際にあり得そうな映像だったのでより怖さが増した』



<p>事業内容③を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>(課題) 中学生の参加が難しかった。中学校の行事予定などとの調整がつかないことなどが要因であった。また、中学3年生は、入試を控え、参加しにくい日程であった。</p> <p>(課題解決) 今後の本事業については、中学側との協議をより密に行い、中学生が参加しやすい日程などを検討する</p>
<p>事業内容③を実施する上で工夫した点</p>	<p>次年度以降、小学校が校外学習の行先として、この施設を候補として、加えることになった。地域の行事と学校の行事の双方が影響し合うことの可能性を感じた行事でした。</p>
<p>事業内容③ 残課題等</p>	<p>すべての行事に関して、一つの課題となるのは、1日行事となると小学生の「昼食」問題がある。今回の行事も午後からの行事としたが、「早めの昼食をすませて参加すること」としたが、事業によっては、昼をまたぐ可能性もあり、そのときに小学生の昼食をどのようにして、保証するのは課題と感じた。学校行事であれば、昼食持参で済ます場を地域行事で各家庭への負担(弁当持参)を考えると、この小学生の昼食については、今後は丁寧に考えていきたい。</p>
<p>事業内容④ 小学生による未就学児(5歳児向け)防災教室</p>	
<p>事業内容④目標 (提供者側)</p>	<p>・本事業は、未就学児に対し、「小学生」が実施する点がポイントである。小学生には、地域の次世代の防災リーダーとしての自覚の醸成と講師役となることで「わかりやすい説明」とは何かを考えさせる契機とする。紙芝居の上演までは、地域の大人が提案するが、その紙芝居をどのように伝えるのか、それらを考えるところから小学生に考えさせる。</p>
<p>事業内容④目標 (参加者側)</p>	<p>・本事業参加の5歳児は、次年度4月に当該の小学校に新入生として入学予定の園児であり、幼小連携の趣旨もある。また、本事業は、地域のキッズ防災リーダーの世代間受け渡しの意味も持っている。この事業に参加した5歳児が再び小学校4年生になったときに地域の「キッズ防災キャンプ」などに自ら希望して参加する動機づけの最初がこの行事になると位置付けている。</p> <p>小学校に進級したのち、次は自分たちが「紙芝居」を上演する側に回りたいとの意識を持たせたい。</p>
<p>事業内容④小学生による未就学児向け防災教室 (実施日:2/13)</p>	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>■日付:2月13日(金) 場所:南小学校 体育館 開始時刻:13時35分 終了時刻:14時13分 ※当日は、平日であるが、小学校が研究授業日であり、小学生は、13時15分で下校する日である。このタイミングで隣接する「光の子保育園」5歳児に小学校体育館に集ってもらい、小学生による防災教室を実施した。</p> <p><参加者> 幼稚園児 33名 小学6年生 7名 地域(大人)防災委員 8名 光の子保育園 職員 6名</p> <p><スケジュール> ・リハーサル ・防災教室開始 ・がたぐら(紙芝居) ・地震体験(揺らしているマットの上を這って進む)</p> <p>【概要】 <紙芝居 がたぐら> 本紙芝居は、「オノマトペ」を利用した未就学児向け防災紙芝居となっている。小学6年生女子2名が紙芝居を上演した。大まかな内容は、保育所を想定した空間でどのようにして、倒れてくる本棚やおもちゃ箱から身を守るか、と</p> </div> <div style="flex: 1;">   </div> </div>

というテーマの紙芝居である。

小学生たちが事前にこの紙芝居を見て、園児を段ボールで囲み、紙芝居を見る空間を「部屋」のような形に工夫することを考え出した。段ボールは、避難所での使用を想定している「居住空間を仕切る段ボール」を利用して、その表面に小学生たちが紙芝居に出てくる部屋の様子を書き込んだ。

また、幼稚園から玩具を借りてきて、それらを段ボールの前に積み上げ、紙芝居の進行に合わせて、地震で倒れる場面を再現するアイデアなどを小学生が考え出した。地震の場面では、最初、小さな揺れの場面では、周囲の段ボールを小学生が揺らし、地震発生をリアルに伝える工夫も行った。

「地震のようです。おもちゃの棚が『パターン』と倒れました」という場面では、実際に周囲に積み上げたおもちゃを小学生が倒すという工夫である。

紙芝居の途中で、『こんなときはどうする?』と進行役の6年生が園児に問いかけ、園児から『逃げる』という言葉うまく引き出していた。

その後、紙芝居では、モノが倒れる中、うまく『逃げる』園児が描かれており、モノが倒れることに対して、まずは逃げるのが重要であると認識させることができた。また、後半では、散らかった部屋と整頓された部屋でどちらが逃げやすいか、との問いもあり、園児たちは日ごろから部屋を整理しておくことの重要性にも気づくことができた。小学生たちは、園児を囲む段ボールや積み上げたおもちゃなどを紙芝居に合わせたタイミングで倒すことで紙芝居を一層リアルに表現することができた。

紙芝居終了後、小学生の誘導で、園児たちは、後ろに用意されたマットに一列にならんで「揺れ体験」に進んだ。

<揺れ体験>

マットを4人の大人が端をもち横に揺らす。その上を園児が四つん這いになって移動するというもの。紙芝居の中でモノが倒れてくる中、逃げるのが重要と内容があり、それを実際に体験することが目的で「揺れ」体験を実施した。四つん這いでどのように進めば安全に移動できるのかを体験してもらった。従来の未就学児向け指導では、「揺れ」が起きたらダンゴムシの形になる、という原則があったが、倒れてくる家具から「逃げる」ことを想定し、モノの転倒などから逃げる方法として四つん這いが有効であることを実感してもらった。

楽しみながら体験してもらうことができた。保育所などは意外と玩具などが周囲に多く置かれており、地震の際の転倒物が多いことが予想されることもあり、四つん這いでの移動方法を提供した。

<多文化・ユニバーサルな視点>

本事業では、当初予定していなかったが、小学生の事前準備段階で地域の留学生(ミャンマー人)がボランティアで参加してくれた。事前準備の際には、小学生たちにミャンマーでの地震のことを話している場面があった。また、当日には、5歳児相手に英語で語りかける場面もあった。改めて、『災害』は、国籍を問わず、年齢を問わず、みなが同時に経験するものであることを再認識した。緊急時の言語の問題などは、地域が多文化化、多国籍化していることを考えると喫緊の課題となると思われる。また、彼ら外国人を巻き込んだ防災訓練、防災意識の共有が必要と思われる。



<p>事業内容④を実施 する中で発生した 課題や失敗点</p>	<p>(課題) 講師役の小学生に直前になってインフルエンザが流行し、役割分担を直前に変える事態となった。 何とか、役割分担変更で対応できた。 園児のほうにもインフルエンザが流行する可能性もあった。</p>
<p>事業内容④を実施 する上で工夫した 点</p>	<p>地域の大人は、できるだけ指示を出さず、小学生に様々なアイデアを出してもらうように心がけた。 例、段ボールで園児を囲うこと、棚や時計を段ボールなどで作って実際に倒すなどのアイデアが出た。これらを1週間前に簡単なものを作成し、当日は、揺らし、倒すというリアルな空間を作ることができた。</p>
<p>事業内容④ 残課題等</p>	<p>・2月実施であったため、小学生でインフルエンザが蔓延している中での実施となった。園児の側にも流行の可能性もあったことから、そもそも2月に実施するという点は、次年度以降検討したい。感染症などのリスクの少ない時期を選びたい。(一方で小学校行事、保育園行事との調整からどうしても年度末実施になってしまうという現状は残っている)</p>
<p>事業内容⑤ 石川県能登半島 志賀町訪問(予定)</p>	
<p>事業内容⑤目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業は、枚方市の小中学生が被災地を訪問し、「復興」に関する状況を同じ中学生から説明を受け、交流することを目的とする。 ・訪問終了後はそれぞれの学校の防災教育などを通じて、相互にインターネットを通じて授業内でのやりとりなど今後の訪問をきっかけに交流が深まる形をつくる。 ・訪問後、文化祭などでの中学生による発表の場面を作る予定である。
<p>事業内容⑤目標 (参加者側)</p>	<p>・災害に関する情報は、発災直後の被害状況などは、様々なメディアを通じて発信されるが、「復興」の状況を知る機会が極端に少なくなる。当時の被災の状況を知ると同時に「復興」の現状や枚方の小中学生として復興にどのようにかかわれるのか、考える機会としたい。</p>
<p>事業内容⑤石川県 志賀町訪問 (実施日: 3/20、3/21)</p>	<p>■日付:3月20日(金)21日(土) 場所:石川県志賀町周辺 1泊2日で予定。</p>
<p>事業内容⑤石川県 志賀町訪問 (実施日:3/20 3/21)</p>	<p>【行程】 1日目 志賀町立富来中学、旧富来小学校訪問 現地の方からの講演 2日目 福浦港 訪問 地震の痕跡と福浦港の歴史 【1日目】 4人1組のグループで見学を行った。 小学校の運動場だったところにたくさんの仮設住宅が建てられており、半壊以上の家については、すでに取り壊され、住民の方々は、ここに住んでいる。 地面には大きな亀裂が入っており、また沈下している箇所もあった。(目視で40cm~1m)。さらに、屋根が落ちている箇所もあった。</p> <p><富来中学校でのトギトーク> ・富来小学校を見学したときのグループに分かれ、2つのテーマ(①お互いの地域の魅力、②将来の夢)について5</p>



分ずつ、富来中学校の生徒と、樟葉南小学校・樟葉西中学校の生徒で交流を行った。また、それぞれのプレゼントを交換し合った。地震のことだけでなく、同じ中学生として、将来の夢を語り合えたことはとてもよかったと思われる。被災者と見学者という立場ではない交流となった。

<現地講師からの講義>

1. 被災地の状況：志賀町と奥能登の違い

・場所による被害の差：講師のいる志賀町も震度 7 を記録しましたが、さらに北の「奥能登」の被害はより深刻でした。

・集落の崩壊：築 90 年の貸別荘がある富来地区(古い町並み)では、家屋がほぼ全壊。道路の寸断により、10 日間も現地を確認できない状況でした。

・初動の遅れ：2 日目には多くの救急車・消防車が奥能登を目指しましたが、道路の大きな段差や橋の損壊がゆく手を阻みました。

2. 発災当時の緊迫した対応(講師 中川さんの視点)

・「またか」という油断：数年前から能登地方で地震が続いていたため、最初の地震速報では危機感が薄かったものの、その直後に未曾有の揺れに襲われました。

・経営者と家族の板挟み：お正月の繁忙期で、別荘やキャンプ場には約 100 名の宿泊客が滞在。

・津波警報が出る中、中川さんはスタッフを避難させ、自身は現場に残って 19 時まで顧客対応にあたりました。

3. 実体験から学んだ「本当に必要なもの」

被災生活において、特に以下の 2 点が強調されました。

①トイレ対策 飲水は支援物資で届くが、トイレを流す水が最も困る。携帯トイレの備蓄や、上から水を入れて流せる「タンクあり」のトイレが推奨される。

②家族のルール 電波が途絶えると連絡も合流も不可能になる。事前に集会場所などの「家族間の約束事」を決めておくことが不可欠。

4. 地域の絆と復興への課題(講師 舟木さんの視点)

・被災者兼支援者として：電気店を営む舟木さんは、自らも被災し仕事が多忙を極める中、商工会青年部としてボランティア活動(温かい食事の提供など)に尽力し、多くの繋がりが生まれました。

・風化への懸念：震災から 3 年が経過しても、倉庫やペンションの修理は終わっていません。世間から「忘れ去られてしまうこと」に危機感を感じており、語り継ぐことの重要性を訴えています。

4. 震度 7 のリアルな教訓

・身体の硬直：震度 7 の揺れの中では「机の下に隠れる」という知識があっても、頭が真っ白になり、体は全く動かなかった。

・インフラの限界：行政による復旧作業が「大通り」に偏り、通学路などの生活道路が後回しにされている現状への不満など、現場ならではの課題が浮き彫りになりました。

【2 日目】(福浦港訪問)

福浦港が北陸で唯一の避難港に指定されている理由は、その独特な地形と水深にあります。

・逆 V 字型の二重構造：上空から見ると入り口が一つで中が二股に分かれた「逆 V 字」の形状をしています。この奥深い入江構造が、外海のシケ(荒波)を遮断します。



・恵まれた水深: 入口で 10m、白い灯台付近でも 6m 以上の水深があり、大型の船でもシケの際に安全に避難・停泊が可能です。

・地殻変動による恩恵: 元々、この地形をうみだしたのが、繰り返された地殻隆起であること、いわば、今回の地震もこの地殻変動の一つ。

・航海の安全を支える工夫: 二つの白い灯台: 上下の灯台が一直線に重なって見えるルートを通ることで、岩礁を避け安全に入港できる仕組み(導灯の役割)があります。

< 灯台の歴史と時代の変遷 >

福浦港のシンボルである灯台は、日本の灯台史においても重要な価値を持っています。

・旧福浦灯台(木造灯台): 明治 9 年まで使用された高さ 5m の灯台。もともとは個人が足元で火を焚いたのが始まりで、菜種油、ガス、電気へと光源を変えながら、個人や地域で大切に管理されてきました。

・堅牢な造り: 下部の石垣はお城の石垣に匹敵する精度で組まれており、先年の能登半島地震でも崩れなかったほどの強度を誇ります。

・時代の転換点: 奈良時代(福良津)から長く繁栄を極めた福浦港ですが、明治以降の鉄道網の発達により、物流の主役が船から陸路へと移り、問屋や船乗りは次第に姿を消していきました。

< 能登半島地震について >

<< 地震の規模と物理的被害 >>

今回の地震は、阪神・淡路大震災の約 2.5 倍(マグニチュードで 0.3 の差)という甚大なエネルギーで能登を襲いました。

・港湾被害: 周辺の港の約 9 割が損壊。奥能登のような大規模な隆起はなかったものの、海底の変化が確認されています。

・住居の現状: 古い家屋の約 3 分の 1 が半壊以上となり、多くが解体されました。現在は補修が進んだ白いコンクリートの箇所と、今なお土のうが積まれたままの崩落道路、ブルーシートに覆われた家屋が混在しており、復興の途上にあります。

・産業の課題: 漁協は存続しているものの、不漁や後継者不足により職員が 1 名体制になるなど、過疎化と産業衰退の深刻な影響が出ています。

<< 発災時の行動と避難の教訓 >>

海と市街地が近い地域において、「迷わず逃げる」判断が生死を分けた実例が示されています。

・避難の決断: 周囲に危機感が薄い中でも避難を呼びかけ、直後に 4m の津波が襲来。床上浸水や家屋損壊が発生しました。

・情報の空白: どの道路が通行可能か、また近隣の原子力発電所がどのような状況かという「命に関わる情報」が届かない不安が浮き彫りになりました。

・避難所環境: 正月帰省により通常の 3 倍の人口がいた中での避難生活。特に水の復旧に 1 ヶ月半を要し、トイレの処理が最大の困難となりました。

<< 日常からの備えと「生存率」を高める工夫 >>

具体的かつ切実な防災対策が共有されました。

・就寝時の備え: 停電対策として眼鏡にクリップライトを装着し、荷物を枕元にまとめておく。

・生存戦略: 倒壊のリスクを考慮し、普段から 2 階で寝るようにするなど、常に「最悪の事態(雨・雪・夜間)」を想定



した行動をとっています。

- ・訓練の成果: 揺れた瞬間、真っ先に机の下へ潜ったのは日頃から訓練を受けていた子供でした。大人は扉が開かなくなるなどの不測の事態に直面しており、反復訓練の重要性が改めて確認されました。

<<今後の展望と震災学習>>

- ・住宅補強の重要性: 過去の地震を機に補強を行っていたことで、今回の激震でも全壊を免れた例があり、対策の有効性が証明されています。
- ・心の復興: 自宅の傾きや過疎化への不安を抱えながらも、「頑張っていく」という強い意志が示されています。
- ・震災の伝承: 石川県では「震災学習プログラム」を通じ、高校生までが震災の爪痕を直接目にする事で、記憶を風化させず次世代へ繋ぐ取り組みを行っています。



事業内容⑤を実施する上で工夫した点

石川県観光連盟を基軸に現地の中学校との連携ができた。また、富来中学の校長先生の配慮で、祝日にもかかわらず、富来中学教員、生徒たちが我々を迎えてくれたことは、枚方の多くの児童生徒の心に残り、素晴らしい交流が生まれた。

事業内容⑤
残課題等

富来中学を筆頭に今回出会った人々と枚方の地域、児童生徒が今後も交流を続けることが重要であると改めて感じた。富来中学の生徒たち、現地の講師の方が言われていた「忘れられることが怖い」との言葉は、交流を継続することの重要性を示している。